

新連載

遠藤 暁及

危険な道楽、アースキャラバン(1)

—パレスチナで演奏 / イスラエルで講習—

本誌 No.200 (去年の7月号) に登場したお坊さんでミュージシャン、タオ指圧を提唱し、パレスチナに平和の火を運ぶアースキャラバンを主宰する遠藤暁及さんの連載を今月号からスタートさせます。第1回はパレスチナから帰国した翌日に原稿を送ってくれました。



真逆だ。パレスチナにはお人良しが多いだけに (時間はルーズだけど)、悪意に満ちた風評被害にあっている彼らが、僕は不憫でならなかった。ワークショップが始まると、彼らのことを思い出さないようにするのに必死だった。

● 旅の目的

今回が何度目のパレスチナ滞在なのかはもう思い出せない。旅の目的は3つあった。ナブルス市で行われるフェスティバル数カ所まで演奏すること。7月後半から8月前半にかけて行われるアースキャラバン中東の準備をすること。そして、テルアビブでタオ指圧や念佛のワークショップをすることだ。

これまでベツレヘムのフェスティバルでは毎年演奏して来たが、ナブルスで演奏するのは初めてだった。この街を最初に訪問したのは約8年前。中東平和教育会議で講師をすることになり、初めてパレスチナに足を踏み入れた時だった。

会議終了後、パレスチナ各地を旅した際にナブルスを訪れた。そして、難民キャンプを支援するNGO「プロジェクト・ホープ」のリーダーであるハキム氏と知り合った。「プロジェクト・ホープ」には、常に海外から十数人の外国人が訪れており、彼らは様々なボランティア活動に従事していた。

昨年「アースキャラバン中東」終了後、僕はなぜか再びナブルスに行きたくなり、「プロジェクト・ホープ」を再訪した。その時、ハキムから、「毎年ナブルス・フェスティバルを主催している。航空券までは出せんけど、バンド全員に宿も食事も提供するから演奏に来てくれないか」と言われた。

その後、秋になり、どうしようかなあ?と思索した。生活のことを二の次にする僕は、「まあアースキャラバン中東の準備もあることだし、イスラエル・タオサンガのためにワークショップもしなければならぬことだし、まゆさん(僕の奥さん)も”行こうか”と言うことだし、、、と自分なりに「行くための理由」をこじ付けて行くことにしたのである。



● ナブルス・フェスティバル

ナブルス・フェスティバルをどう説明したら良いのかよくわからない。演奏会場は、街の中心にある豪華なところもあったし、郊外にあるアウトドアもあった。難民キャンプの特設会場でも演奏した。

海外から来たゲスト・ミュージシャンは、北欧のスウェーデンから来たバンド、南米のチリ音楽を演奏するアメリカ在住のバンド、さらにイギリスから来たバンドもあった。

音楽以外にも、料理の腕自慢が競い合うフード・フェスティバルの他、各地で様々なワークショップが行われていた。フィナーレは、イスラエル政府が造った、世界的に悪名が高い「分離壁」の検問所まで、10kmを走る、「ナブルス・マラソン」だった。こうした様々なことが街の各地で10日間に亘って行われるのが、ナブルス・フェスティバルだった。

● 一番嬉しかったこと

4月12日に日本を発った僕らのバンド「アミナダブ」一行は、翌日の早朝、テルアビブの空港に着き、大量の音楽機材と共にナブルスに向かった。現地では各地で演奏し、地元ラジオに出演した。さらに、各地から来た人たちと交流した。

街は穏やかだったし、現地の様々な人から暖かいもてなしを受けた。アースキャラバン中東のプログラム「8月9日・長崎の日」をナブルスですることにもなった。

最後に、ミュージシャンとしてとても嬉しいことがあった。それは複数のパレスチナ人や外国人から、「ナブルス・フェスティバルで演奏した中で、キミらのバンド「アミナダブ」が最高だったよ」という、お褒めの言葉を頂戴したことだった。

■ オフィシャル・サイト ■

<http://endo-ryokyu.com>

● 胸が引き裂かれるような痛み

テルアビブでこれから2日間に亘って行われるタオ指圧ワークショップの会場に向かう車に揺られながら、僕は胸が引き裂かれるような痛みを感じていた。

それは、その2日前まで僕が滞在していた、「壁」の反対側に住むパレスチナ人たちの苦しみを知らない人たちの中に入って行かなければならなかったからだ。(距離的には、車でわずか一時間に過ぎない)

多くのイスラエル人は、無意識ではわかっているが、自国の政府が占領し、土地や人権を奪っている人たちの苦しみについては考えない。車の窓に頭をもたれていた僕は、「日本政府が朝鮮半島を植民地にしていた頃の日本人も同じだったんだろうな」とぼんやり考えていた。

分離壁の反対側で出会うのは、人懐っこく、ビックリするぐらい気前が良く、知的レベルの高い人たちだ。僕ら一行は、今回の旅でも様々な人たちに夕食を奢られた。街はのどかで食事も美味しく、くつろいで過ごすことができた。何日でも滞在したくなり、帰るのが惜しくなるほどだった。

そんな彼らが、なぜか世間的にはテロリストの烙印を押されている。そして、イスラエル人のみならず、世界の多くの人たちは、その風評被害を事実だと思っている。

講師を務めるテルアビブのワークショップ会場に向かいながら、あたかも自分が世間に屈して、優しい友人たちを裏切ることになったかのような気ずらした。イスラエル・タオ指圧のマガリは、パレスチナ人に味方する数少ないイスラエルの人権平和活動家の一人だ。彼女らも同じような気持ちを味わうのかも知れないな、と思った。

パレスチナの実態は世間のイメージとは

photo by Abed Kababji

photo by Abed Kababji

★アースキャラバン・ピースサイクリングが7月後半に長崎・広島で行われ、5カ所イベントがあります。こよみページをごらんください。

【写真左上】ナブルス・フェスでのアミナダブの演奏 【右下】テルアビブ・タオ指圧ワークショップ

